

「アリストテレスとフィリス」

— 最古の類話を検証する —

西村 正身

「アリストテレスとフィリス」の名でタイプ登録されている説話がある¹。命名のもととなった作品は、13世紀末頃に書かれた無名氏のドイツ語による作品である。藤代幸一による邦訳がある²が、ここではフォン・デア・ハーゲンによる梗概でどのような物語なのかを紹介しよう³。

ギリシアの王フィリッポスは息子アレクサンドロスの教育をこのうえなく聡明な師アリストテレスに委ね、ふたりのために、召使いのほかに、美しい庭園のついた建物を用意した。期待に満ちた教育と指導は、しかし、愛によって妨げられてしまった。若くて燃えるような気性のアレクサンドロスが、母親の侍女である美しいフィリスに熱を上げてしまったのだ。その麗人は彼の愛に応え、やがてふたりは人目を忍ぶ庭園で結ばれた。それを知ったアリストテレスがそのことを王に嘆き訴え、王は娘を、処罰するぞと言って脅した。彼女は、自分は何も悪いことはしていないと誓い、王妃がそのとおりだと証言した。しかし、愛するふたりは厳しく監視され、引き離されてしまった。アレクサンドロスはブツブツと不平を言いながらも教えを受け続けていた。一方、悲しみに暮れるフィリスは復讐することをたくらんだ。このうえなく魅力的に装い、朝早く、雪のように白い素足になって、庭園の朝露の中を、花を集めながら、さらさらと音を立てている泉のところまで、風のように軽やかな服を膝のうえまでたくし上げて、歩き始めたのだ。老哲学者は窓越しに彼女を見つめているうちに、一握りの花を窓から投げ入れては愛嬌を振りまいて挨拶をするその魅惑的な女に惑わされてしまった。彼は彼女を招き入れ、擦り寄るようにそばにすわった彼女に、一晚二十マルクではどうだと持ちかけた。お金で純潔を売ったりはしないわ、と彼女は拒んだが、あそこに掛かっている鞍を背中

¹ ATU1501. (脚注11を参照)

² 藤代幸一『アリストテレスの笑い』創造社、昭和47年、pp. 6-17。

³ *Gesammtabenteuer*, hrsg. von Friedrich Heinrich von der Hagen, Erster Band, J.G. Cotta'scher Verlag, Stuttgart und Tübingen, 1850/Reprint, WBG, Darmstadt, 1961, p. 19 <Aristoteles und Phillis>. テキスト原文は同書pp. 21-35 と *Neues Gesamtabenteuer*, 1. Band, hrsg. von H. Niewöhner, 2. Aufl., Weidmann, Dublin/Zürich, 1967, pp. 234-243 <Aristoteles und Phyllis>.

にのせて、わたしの腰帯を手綱にし、そうやってわたしを庭中乗せて歩いてくれたら、何でも言うとおりにしてあげるわと言った。世に並ぶ者のないほどに聡明なアリストテレスとて、アダムやサムソン、ダヴィデやソロモンほどに堅固ではなかった。愛欲に負けて、馬乗りになることを許したのだ。魅惑的な彼女は、薔薇の小枝を手にして彼にまたがり、白髪の老人が四つん這いになって庭中を歩き回っているあいだ、^{ミンネリート}恋歌を歌っていた。目的の場所まで来ると彼女は上機嫌で飛び降り、あなたがわたしの名誉と愛を奪ったんだわ、と愚かな老人をなじり、これで百歳の^{よわい}齢もまた七歳の子と同じになってしまったわね、と嘲り、あんたなんかくたばってしまえばいいんだ、と言った。王妃が侍女たちといっしょに宮殿の鋸壁のあいだからその一部始終を見ていたので、そのとんでもない恥辱はすぐさま王や宮廷中に伝わり、至る所に知れ渡ってしまった。それで、聡明な師は悪態や嘲笑から逃れるために、一週間後、書物を始めとして全財産を持って密かに船に乗り込み、ガリシアという島に出奔した。そこで彼は、美しくも不実な女たちのたくらみについて大きな本を著した。そういう女たちには近づかないということ以外には、役に立つことは何もないのである。

これは、このモチーフを扱ったヨーロッパ最古の物語というわけではない。これより半世紀ほど前の1237年頃にフランスのアンリ・ダンドリによって『アリストテレスの短詩』という作品が書かれている。これも幸いなことに新倉俊一の訳で読むことができる⁴が、このダンドリの作品では、アレクサンドロスの相手は「異国の女」というだけで、名は与えられていない。そして、これより早いヨーロッパ最古の作品とされているものは、説教師ジャック・ド・ヴィトリ Jacques de Vitry (1160/70-1240) によって書き記されたものである。年代的にはダンドリの作品の直前ということになるであろうか。次のような物語である。

「アリストテレスとアレクサンドロスの妻」

(『旧約聖書』外典)「シラ書」(19.2)に、「娼婦と身ひとつになる者はろくでなしになる」とあり、(『新約聖書』)「コリントの信徒への手紙1」(5.6)には、「パン種がわずかに混ざるだけで、練り粉はすべて台無しになってしまう」⁵と書かれている。そのことを確かに身をもってアリストテレスが証明したと言われている。彼は他のことはさしおいて若者アレクサンドロスに、このうえない美人ゆえに心から愛しているからといって、そ

⁴ アンリ・ダンドリ『アリストテレスの短詩』(Henri d'Andeli, *Le Lai d'Aristote*)。『フランス中世文学集3』所収、白水社、1991年、pp. 254-269。

⁵ 過ぎ越しの祭りを祝うためにパン種が入っていないパンを使う。わずかでもパン種が混ざるとその練り粉は祭り用としては使いものにならなくなってしまう。

うしばしば奥方のもとを訪れるものではない、と言って教え諭した。それまでの頻繁な抱擁がお留守になってしまったので、彼女はたいへん嘆き悲しみ、いろいろと調べはじめた。そのせいで、夫の心に思いがけなく大きな変化が生じることになったのである。師のアリストテレスがそのことを進言したのだと確信した彼女は、熟慮を重ね、あれこれと思い悩んだ末に、アリストテレスの呪縛から逃れる手段というか、方法を考え出した。庭園を散歩しながら、繰り返し彼に目を向け始めたのだ。彼は研究に励んでいる部屋の窓からちらちらと彼女を見返しては、目で微笑みかけ、気紛れに声をかけたりしているうちに、その堅固な心が和らぎ始めた。なおも彼女は裸足になり、衣服のすそを持ち上げて向うずねをあらわにしたりしながら、何度も彼の目の前を歩き回った。かくしてついに彼のか弱き心は愛欲のとりこになってしまい、どうか我が思いを叶えていただきたいと王妃に懇願し始めた。彼女は、「わたしを誘惑して騙そうとしているのね。だって、あなたのようにあらゆる英知を備えた人がそのようなことをそそのかすなんて、とても信じられないんですもの」と言った。何としてもその気にさせようと彼が言葉を続けるので、彼女はこう言った、「心からわたしを愛しているのだということは分かったわ。わたしが何を言っても、わたしへの愛にかけて、言うとおりにすることを拒んではだめよ。あしたの朝早く、まだ夫が寝ているうちにこの庭園に来て、四つん這いになってあちこち歩き回ってちょうだい、わたしが馬乗りになれるようにね、そうしたらゆさゆさと揺すってあげるわ」。愛欲のとりこになり、誘惑され、そそのかされた（『ヤコブの手紙』1.14）哀れな男が同意すると、首尾よく望みどおりの成果を手に入れた彼女はアレクサンドロスのもとへ行って、「あしたの朝早く、心の準備をしておいてちょうだい。あなたからわたしを遠ざけようとしたあなたの先生を信用していいものかどうか分かるわ!」と言った。かくして夜が明け、王妃がアリストテレスに馬乗りになっているところへ、不意に王がやって来て、彼を非難し、命はないものと思えと脅したので、顔を真っ赤にし、さんざんうろたえたあとでやっと我に返った師がこう応えた、「どうかよくよくお考えになってください、わたしはまだ若いあなたのことを考えて、誠実に方策を講じたのです。と申しますのも、お妃の策略と言いますか、姦策がたいへん優っていたのだとはいえ、年も重ね、死すべき者のなかでもっとも聡明でもあるこのわたしを欺き騙し、とりこにすることができたのですし、多くの優れた師に打ち勝ってきたわたしに打ち勝ったのです。そうであればこそ、なおさら容易にあなたを騙したり、誘惑したり、欺いたりすることができるというものです。わたしの前例がなくとも、どうか用心してくださいますよう」。それを聞いた王は怒りを鎮め、巧みに応答した師を厳しく責めるようなことはしなかった⁶。

⁶ *Die Exempla aus den Sermones feriales et communes des Jakob von Vitry*, hrsg. von J. Greven, Sammlung mittellateinischer Texte 9, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg 1914, pp. 15-16 <De Aristotile et vxore Alexandri>.

ここでもアリストテレスの妻は名を与えられていないが、ともかくこの物語が発端となって上記2作品を始めとし、ヨーロッパにおける文学や美術に多大な影響を与えていくことになるのである。美術の分野から一点だけ銅版画（ドライ・ポイント）を紹介しておこう。岩波書店の月刊誌「図書」2007年6月号（第699号）の表紙を飾った銅版画である。15世紀末に中部ライン地方で活躍した、ハウスブーフ(家庭図書)の画家(Hausbuchmeister)と通称される画家による1485年頃の作品で、直径15.5cm。「アリストテレスとフィリス」と題され、現在はアムステルダム国立美術館の版画室に所蔵されている。



ハウスブーフの画家「アリストテレスとフィリス」1485年頃
アムステルダム国立美術館版画室蔵

しかし、この作品のヨーロッパにおける足跡をたどることが本論の目的なのではない。類話をさかのぼって、現在世界的に最古の類話とされているものが、果たしてほんとうに納得のいく最古の類話として認めうるものなのかどうかを検証してみようというのである。

さて、この物語はジャック・ド・ヴィトリの創作かということ、そうではない。では、彼はこの物語をどこで聞き知ったのか。それは推測によって判断するしかないのだが、アウグスティノ修道会の聖堂参事会員であった彼が十字軍の説教師として成功し、1216年から司教としてイェルサレム王国のアッコンやエジプトのダミエッタに滞在していた10年あまりの間に聞き知ったものと考えて間違いはないであろうと思われる⁷。イスラーム世界にもこれと同じモチーフの物語があるのである。イスラーム世界で最古の物語⁸は偽ジャーヒズの『物事の良い面とその反対の面について **ألمحاسن والأضداد**』の中に見出すことができる。次のような物語である。

「シーリーンの復讐」

マギの祭司長はホスローのもとに伺候すると、いつもこんなふうに言っていた、「幸福と繁栄のうちに生涯をお過ごしくださいますように、おお、王様、敵に勝利いたしますように！ よきことに恵まれ、支配欲の強い女たちの言いなりになったりしませんように（お妃たちの尻に敷かれるようなことになりませんように）！」そうしたいつもの言い草に、その時代でもっとも聡明で美しい女であるシーリーンが腹を立てた。それで、ホスローにこう言った、「あの祭司長もいい年ですし、あなたはあの方の意見や助言がないと困りますわね。あなたがあの方を必要としているので、わたし、あの方に侍女のミスクダーナを贈ろうと思いつきましたの。彼女は聡明だし、美人ですわ。あの方に彼女を受け取ってくれるよう頼んでくだされば、うれしいのですが」。ホスローがそのことを祭司長に話すと、彼は、その美しさや卓越した才能を知っていたので、その娘が欲しいと思った。そこでこう応えた、「お妃さまがありがたいことにこの私にその最良の侍女をお贈りくださるというのですから、おお、王様、喜んで拝領いたします」。それを受けてシーリーンがミスクダーナにこう言った、「あの老人のところへ行ったら、あなたの魅力を存分に見せつけて、よく仕えてやりなさい。あいつがあなたと寝たいという気になっても、あいつの背中に鞍をのせて馬乗りになることを承知させて、それが実行される日時をわたしに知らせるまでは、抵抗するのよ。そうしたら、王様に挨拶に来

⁷ *The Exempla of Jacques de Vitry*, ed. by Th. Fr. Crane, 1890/Rpt., Kraus Reprint, 1967, pp. xxvii-xxxiii.

⁸ Ulrich Marzolph, *Arabia ridens*, Bd. 2, p. 118, No. 469, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 1992.

たときに、『支配欲の強い女たちの言いなりになったりしませんように（お妃たちの尻に敷かれるようなことになりませんように）！』なんて、二度と付け加えたりしなくなるわ。」「仰せのとおりにいたします、お妃さま」と、ミスクダーナは応えた。

こうして彼女はその尊敬すべき主人のもとへ行き、彼が居住する王宮の一面で共に暮らすようになった。彼の世話をし、愛らしく思いやりをこめて振舞った。そのうえ、自分の魅力を見せつけて、胸やうなじをあらわにしたり、すねや太ももを見せつけたりした。やがて祭司长は彼女が欲しくなり、彼女のすべてを自分のものにしたいと願うようになった。ところが、彼女が抵抗し始めたので、そのことによって彼の欲望はますます強くなっていくばかりであった。ついに組み伏せられてしまった彼女は、こう言った、「あなたの背中に鞍をのせて馬乗りするまでは、あなたの願いを聞き入れるわけにはいかないわ。それをさせてくれたら、あなたが欲しくてたまらなくて、承知しろとせがんでいる喜びを、進んであなたにあげるわ」。数日の間彼は抵抗したが、その間も彼女が美しく装い、魅力を見せつけたので、ついに彼の抵抗力もくじけてしまった。そして、「お前の望むとおりにするがいい」と、彼女に言った。そこで彼女は小さな鞍覆いと腹帯としりがいを用意し、彼を四つん這いにさせて覆いと鞍を背中にのせ、しりがいを辜丸のところでしっかりと結びつけさせた。その間自分はそばに立っていたが、用意が整うと、ドウドウと声を掛けながら馬乗りになり、シーリーンのもとに使いをやって、そのことを知らせた。シーリーンは王に、「祭司长の住まいに行ってみませんか、侍女と何をしているのか、窓から覗き見してみましようよ」と言った。出かけたふたりが覗いて見ると、侍女が祭司长の背中の鞍に乗って体を揺り動かしている姿が目に入った。ホスローが彼に声を掛けた、「おお、これはいったいどうしたというのだ？」顔をあげて窓のほうを見た祭司长は、そこに王がいることに気づくと、こう言った、「こうやって、いつもお勧めしておりましたように、支配欲の強い女たちの言いなりにならないように（お妃たちの尻に敷かれるようなことのないように）しているのです」。ホスローは笑って言った、「祭司长ともあろう者が何たることだ、しかし、そなたにそのようなことをさせるとは、天晴れなやつがいたものだ！」⁹

この偽ジャーヒズの本は当初、中世アラブの代表的な文豪ジャーヒズ（776/7頃～868/9頃）その人の作品と考えられていたようだが、その後の研究により著者はジャーヒズとは別人であることが判明している。偽ジャーヒズのこの作品は10世紀後半に書かれたという

⁹ 原文は Pseudo-Dschāhiz, *Al-Mahāsin wa'l-Addād*, ed. G. van Vloten, Leiden 1898, pp. 255-257にあるのだが、未見なので *Von Kalifen Spaßmachern und klugen Haremsdamen, gesammelt und übersetzt von Max Weisweiler, Eugen Diederichs Verlag, Düsseldorf-Köln, 1963, pp. 108-110* より訳出した。

のが現在の見解である。

ここまではすでに19世紀末までには分かっていたようである。藤代幸一『アリストテレスの笑い』は、この話のもとをインドの『パンチャタントラ』に求めている¹⁰。だが、この類話を含む『パンチャタントラ』はプールナバドラ作のもので、インドの作品としては珍しく年代がはっきりとしており、1199年に書かれたものである。つまり、偽ジャーヒズよりも200年ものちの作品であるということで、最古の類話探しにおいては対象外ということになる。幸いなことにこの作品も邦訳がなされており、あまり目に触れることのない珍しいものであると思われるので、該当する物語をここに引用させていただくことにする。

第四章挿話第六「愛の奴隷となったナンダとヴァラルチの話」

知られた力と英雄的な行為をもち、多数の王達の群の冠の光輝の網で編み合わされた足椅子を有する処の、海を境界とするプルティヴィー（大地の女神）の夫である、ナンダという名の王があった。

彼にすべての教典に通曉した、総体の真理を体得したヴァラルチという名の大臣があった。そして、彼の妻は愛情の喧嘩によって気をわるくしていた。そうして彼女は従来^{しず}の愛撫の多くの種類を満足させつつも、まだ鎮まらなかった。そこで夫が言った。「よい女よ、何でもその仕方によって汝が満足するであろう、それを言え、必ずわしはそれを行なおう」

そこでこういう事が彼女によって言われた。

「もしも頭を剃って私の両足の処に身を投ずるならば、その時に私は光輝に面を向けたものとなります」

そこでその様に行われた時に彼女は満足して明るくなった。

然るにナンダの妻も又それと同様に実に、気をわるくして、寵愛されて居りつつも満足しなかった。彼により言われた。

「よい女よ、汝なしには一刻もわしは生きては居られない。汝の両足の処に身を投じて汝を喜ばそう」

彼女が言った。

「もしも馬のくつわを口にくわえさせて、私があなたの背中に乗って、あなたを乗りまわしたならば、しかももしも駆られたあなたが、馬のように嘶^{いなな}くならば、その時に私はきげんを直そう」

その様に行われた。

¹⁰ 藤代幸一、*ibid.*, pp.97-98.

ところが、夜明けの時に、法廷に裁判の為に坐った王の処に、ヴァラルチが到着した。そして彼を見て王は尋ねた。

「オオ、ヴァラルチよ、どうして君は非時の月（禁じられた月）に頭を剃られたのか」
彼が言った。

「何を与えないか、何をなさないか、〔女達によって頼まれた男が、馬でない者らもそこでは嘶く、頭は月のある時でない月でも剃られる〕」と¹¹。

この物語はプールナバドラ以外の『パンチャタントラ』には見られないものであり、これまで紹介してきた類話とは多少その趣を異にしているとはいえ、女の言葉に惑わされた男がくつわをくわえて女を馬乗りさせ、馬のようにいなくなっているという点では、間違いなく「アリストテレスとフィリス」の類話であると見ることができよう。

では、「アリストテレスとフィリス」の類話は偽ジャーヒズより古くさかのぼることができないのかというと、各種のインデクス類には、最古の類話として、シャヴァンヌ『中国の大蔵経から選び出した500の物語と寓話』のNo. 453¹²が挙げられているのである。次のような物語であるが、シャヴァンヌが翻訳の典拠としている『経律異相』¹³より訳出して紹介しよう。

「独角仙人の心が世欲に染まり、遊女を肩車する」

そのころ波羅奈（バーラーナシー）国の山中に仙人がいた。陰暦の八月（原文は以仲秋之月）、たらいに小便をしているとき、鹿が交尾しているのを見て淫らな気持ちになり、精液をたらいの中に漏らした。雌鹿がそれを飲んで、すぐさま身ごもってしまった。月満ちて鹿は人間によく似た子を産んだが、頭には角がひとつあり、足は鹿に似ていた。子を産むとき鹿は仙人の住まいの前に行き、そこで子を産み、仙人に託して立ち去ってしまった。外に出てきてその鹿の子を見たとき、自然とを感じるものがあって、仙人はそれが自分の子であることを知った。その子を取り上げて養育し、大きくなると、心を尽くして教育をした。（やがてその子は）十八種の大部な經典に通じるようになり、座禪

¹¹ （プールナバドラ）『梵語直訳印度古譚 ^{ばんちやんとら} 五章の物語』宗茅生訳、平凡社、昭和40年、p. 292。引用末尾の〔 〕内は291ページより補った。

¹² Édouard Chavannes, *Cinq cents contes et apologues extraits du Tripitaka chinois*, tome III, pp. 233-237, Ernest Leroux, Paris, 1911.

¹³ 寶唱等集『経律異相 *Ching-lü-i-hsiang*』巻39第16「独角仙人情染世欲為姪女所騎」、pp. 209-210。『大正新脩大蔵経』第53巻（*Taisho Tripitaka*, vol. 53）所収、No. 2121、大蔵出版、1928/1990（普及版）。訳出に当たってはシャヴァンヌのフランス語訳を参照した。仏典の中国語名は小野玄妙・丸山孝雄編『仏書解説大辞典 *The Encyclopedia of East Asian Buddhist Texts*』大東出版社、1999（縮刷版）による。以下同様である。

をも学んだ。四つの無量心を実践して、五つの神通を得た。あるとき山に登ると、大雨が降ってきてぬかるみになり、(鹿に似た) 足が不便だったので、滑ってその足に怪我をしてしまった。大いに腹を立てた彼は、呪いを掛け、雨に降らないよう命じた。仙人の福德により、龍や鬼神たちがみな、雨を降らせないようにした。雨が降らなくなると穀物や果実が実らない。人々は窮乏し、どうやって生きていけばいいのか、分からなくなってしまった。波羅奈王は悲しみ嘆き、苦しみ悩んだ。高官たちを招集して雨のことを諮ると、聡明な男が言った、「一角仙人がいると聞いたことがあります。山に登ったときに足を怪我して腹を立て、十二年間雨が降らないようにと呪いを掛けたのだそうです」。王はすぐさま(国民に) 呼びかけた、「わが家臣となり、民のために仙人の五つの神通を失わせることができた者には、王国の半分を分け与え、統治を委ねることにする」。その波羅奈国にひとりの遊女がいた。名を扇陀といい、美しく、大金持ちであった。その遊女が王の布告に応じてやって来ると、こう言った、「それがもし人であるのなら、わたしがその神通を破ってみせましょう」。そう言うと彼女は金の鉢を手に取り、見事な宝物を盛って、王に言った、「その仙人に乗って戻ってきますわ(我当騎此仙人来)」。遊女は五百台の馬車を要求し、五百人の美女を乗せ、さらに鹿に引かせた五百台の車にいろいろな薬草を練りこんださまざまな媚薬(歓喜丸)を積み込んだ。さらに色も味も水と変わらない強い美酒をいろいろと持った。(彼女たちは) 樹皮でできた衣服を身にまとって木々の中を歩き、まるで仙人であるかのように振舞った。目指す仙人の住まいの近くに草庵を作って、そこに滞在した。散歩していた一角仙人がそれを見つけた。女たちは皆、良い香りのする美しい花を手外に出てきて、仙人を出迎えた。仙人は大いに喜んだ。女たちは快い言葉をかけて敬意を表しながら、仙人にあれこれと問いかけ、草庵に招き入れて、柔らかい床にすわらせた。清らかな水だと言っては酒を振舞い、木の実だと言っては媚薬(歓喜丸)を与えた。彼はそれを食べたり飲んだりしながら、女たちに、「生まれてからこの方、このような木の実や水は見たことがない」と言った。女たちは応えた、「心から善いことをしたので、天がわたしたちの願いを聞き入れて、この木の実や水を与えてくださったのです」。仙人が尋ねる、「どうしてお前の肌の色はふっくらとつやつやしているのだ？」(女が) 応える、「このおいしい木の実を食べ、このすばらしい水を飲んでいるからですわ」。仙人が言う、「ここに滞在して住むことはできないのか？」(女が) 応える、「できますわ」。女は、いっしょに体を洗おうと彼を誘った。女の手がやさしく彼に触れる。心が動き、淫欲を遂げた。すぐさま神通が失われ、天は七日七夜に渡って大雨を降らせた。皆はそのまま七日間、歓楽を尽くし、飲食を続けた。酒食がことごとく尽きてしまったので、手近の水や木の実を飲み食いしたが、美味しくない。(仙人が) 前のやつがいい、と求めると、(女が) 応えた、「もうなくなってしまったから、これからいっしょに取りに行きましょう。手に入る所はそんなに遠い

所ではありませんから」。仙人は、「よし、そうしよう」と言った。彼らは出発した。都から遠くない所で女はしゃがみ込んで、「疲れてしまって、もう歩けないわ」と言った。仙人は、「歩けないのなら、肩車をしてやろう。お前を運んでいってやるよ（騎我頂上。我当担汝）」と言った。女は使いに手紙を持たせて、「王さま、すぐにおいでになって、わたしの知恵が成し遂げたことをご覧になってください」と知らせた。（出迎えた）王はその様を見て、「いったいどうやってやり遂げたのだ？」と訊ねた。女は言った、「策略の力を使えば、できないことなど何はありませんわ」。（王は仙人を）都に住まわせ、たくさんの贈り物をして、敬った。欲しいものは何でも与え、頼み込んで大臣にもなってもらった。ところが、都に住んでから幾日も経たないうちに、仙人は痩せ衰えてしまった。深く瞑想した彼は、この世の欲がいやになった。王が仙人に、「なぜ楽しくないのですか？」と尋ねると、仙人は応えて、「この世の五つの欲をすべて手に入れた今、いつも心に思うことはあの森のことだけなのです」。王は言った、「もともとは日照りの災いを除くのが目的であったのだ。どうしてその志までも奪い取っていいことがあるう」。すぐさま（王は）彼の役目を解いてやった。（仙人は）すぐに山に戻って精進したので、やがてまた五つの神通を得た。その一角仙人とは私（ブッダ）のことであり、遊女とは耶輸陀羅（ヤショーダラー）のことである。（出大智論第十七卷）

この物語を、各種のインデクスが例外なく「アリストテレスとフィリス」の最古の類話として挙げており、『経律異相』の編纂年である516年をその年代としている¹⁴。これを最古の類話として認めるのであれば、末尾に出典として記されている『大智度論』の年代を挙げなければならない。『大智度論』は大乗仏教を大成したインドのナーガールジュナ（龍樹。180年頃～240年頃）の書いたものとされてきたが、近年、ナーガールジュナとは別人の作であるという説が受け入れられつつあるという¹⁵。サンスクリット語による原文は残されていないが、クマーラジーヴァ（鳩摩羅什。344～413年）による漢訳が残されているので、誰の作にせよ、少なくとも『経律異相』の516年よりさらに100年ほどさかのぼって、413年とすることは許されよう。しかし、クマーラジーヴァ（鳩摩羅什）は『大智度論』をナーガールジュナ（龍樹）の作であると信じていたようであり、もしこれまで

¹⁴ *Enzyklopädie des Märchens*, hrsg. von K. Ranke, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1977, pp. 786-787 (Aristoteles und Phyllis, by R.W. Brednich). Hans-Jörg Uther, *The Types of International Folktales*, FF Communications, No. 284, Helsinki, 2004, <ATU 1501 Aristotle and Phyllis> (これまで AT として使われてきた Antti Aarne/Stith Thompson, *The Types of the Folktale* の改定版である)。Hasan M. El-Shami, *Types of the Folktale in the Arab World*, Indiana University Press, 2004, p. 816 (No. 1501, Aristotle and Phyllis). René Basset, *Mille et un contes, récits et légendes arabes*, Édition dirigée par Aboubakr Chraïbi, Collection Merveilleux no. 29, José Corti, Paris, 2005, tome I, pp. 402-404 (III-64, Le vizir sellé et bridé).

¹⁵ 鎌田茂雄・河村孝照他編『大蔵經全解説大辞典』雄山閣出版、平成10年、p. 409。

の定説通りにナーガールジュナ（龍樹）の作であるとするなら、さらにさかのぼって、その成立年は240年頃ということになる。

しかし、これは、今まで挙げてきたドイツ中世の作品、ジャック・ド・ヴィトリの作品、偽ジャーヒズの作品、そして少し別のモチーフをも含むプールナバドラ『パンチャタントラ』からの引用と比べて、よほど趣の異なるものであり、同じテーマの作品である、つまり類話であると判定するには、ちょっと戸惑いを禁じざるを得ない物語であると言えよう。お気づきの方もいることと思うが、これはわが国でお馴染みの謡曲『一角仙人』や歌舞伎『鳴神』に発展していくお話の原話そのものである。『一角仙人』の話は古いもので、ジャータカや仏典にいくつかを見出すことができる¹⁶。しかし、遊女を肩車しながら山を降りてくるというモチーフを含む「独角仙人」は『大智度論』第17巻¹⁷が初出のようであり、他の仏典等には見出すことができない。『経律異相』に引用されたものと『大智度論』のものとはいくらかの相違が見られ、2つだけ挙げると、先に訳出した『経律異相』の中の「その仙人に乗って戻ってきますわ（我当騎此仙人来）」という遊女の言葉は、『大智度論』では「その仙人のうなじに乗って戻ってきますわ（我当騎此仙人項来）」となっており、同じく「肩車をしてやろう。お前を運んで行ってやるよ（騎我項上。我当担汝）」という仙人の言葉は、「騎我項上当項汝去」となっている。つまり、「私のうなじの上にまたがれ。お前をうなじに乗せて（つまり肩車をして）連れて行ってやる」ということであろう。

この物語を「アリストテレスとフィリス」の最古の類話とみなしたのは、連れ立って山を降りるときに遊女の策略にはまって遊女を肩車してやった、つまり、どこにせよ女を自分の体の上に乗せてやったという点を、「アリストテレスとフィリス」に連なるモチーフと捉えたからであろうと思われる。多くの学者たちによってこれが最古の類話であると指摘され、それが世界的に認められているらしいことは確かなのであるのだが、果たしてこの物語を「アリストテレスとフィリス」の最古の類話と見て納得できるのであるだろうか。

もう一度言うと、偽ジャーヒズの作品までは何の問題もなく類話であると納得できるが、この「独角仙人」の物語はすぐさま類話であると断定するには躊躇せざるを得ないということなのである。連想をたくましくすればその視野の中に入ってくる物語なのではあろうが、ここには色事は適度にせよという忠告もないし、恋路を邪魔された女の恨みもないし、忠告した者への女による復讐もない。色欲に惑わされて女を馬乗りにさせたわけでもない。あくまでも、疲れてもう歩けないと言った女を肩車してやったにすぎないのである。この

¹⁶ 『ジャータカ』523 (Alanbusa-jātaka)と526 (Nalinikā-jātaka)。『ラーマーヤナ』1・9-10。『マハーバーラタ』3・110-113。『仏本行集経 Fo-pên-hsing-chi-ching』第16巻。『摩訶僧祇律 Mo-ho-sêng-ch'i-lü』第1巻。『根本説一切有部毘奈耶破僧事 Kên-pên-shuo-i-ch'ieh-yu-pu-p'i-na-yeh-p'o-sêng-shih』第12巻など。

¹⁷ 『大智度論 Ta-ch'ih-ta-lun』。『大正新脩大藏經』第25巻 (Taisho Tripitaka, vol. 25) 所収、No. 1509。「独角仙人」の話はp. 183。

物語は、片や東漸してわが国の「一角仙人」「鳴神」となり、西漸しては『バルラームとヨアサフ』の第10寓話を通して、『デカメロン』四日目序話やラ・フォンテーヌ『コント』3・1「フィリップ爺さんの雁」などに連なっていく物語であるとするほうが自然であろうと思われる¹⁸。

では、各種のインデクスに記されているシャヴァンヌのNo. 453という指示は間違いなのかというと、必ずしもそうとは言い切れないところがあるので、事情はやや複雑である。すでに述べたようにシャヴァンヌのNo. 453そのものは『大智度論』第17巻を典拠とする『経律異相』所収の物語を訳出したものであり、「アリストテレスとフィリス」の類話とは言い難い。しかしシャヴァンヌは第4巻に膨大な注釈を載せており、No. 453の注釈(pp. 230-233)には、その類話として上述の『バルラームとヨアサフ』『デカメロン』『コント』を挙げたあとに、段落を改めて、遊び女が隠者や聖人や王の背に乗るという行為は『アリストテレスの短詩』によって知られている、ということを述べ、そのあとに、シーフナー(F. A. von Schiefner)がプラディョータ王の逸話の中にそうした行為を再発見していると記して、*Mémoires de l'Académie des Sciences de Saint-Petersbourg*, t. XXII, n° 7, p. 25-27 = Trip., XVII, 2, p. 8 r° - 9 r° という文献を挙げているのである。この研究誌に載せられているシーフナーの論文名は「パーンダヴァの娘ターラー Das Pândava-Mädchen Tārā」である¹⁹。この論文は未見であるが、シャヴァンヌの記述によると『アリストテレスの短詩』のほかにジャーヒズや『パンチャタントラ』、ジャータカ191などにも言及しているらしい。ジャータカ191(Ruhaka-jātaka)は、司祭が馬具で飾り立てられた馬を王から拝領し、王に随行して出かけると、人々がその馬ばかりをしきりに誉める。帰宅してそのわけを尋ねた司祭にいたずら好きな妻が、馬は馬具のせいですばらしく見える、あなたも馬具をつけて四足で歩いて王に会えば、王も人々もあなたを誉めてくれるだろうと言う。その通りにして皆から辱めを受けて怒った司祭は、王の仲裁を蹴って離婚し、別の女と再婚するという話で、馬になるという連想の中に入ってくる物語ではあるが、「アリストテレスとフィリス」の類話といったものではない。

ところで、シャヴァンヌもシーフナーがその論文で訳している Tripitaka, XVII, 2から2話を訳出しており、このTripitaka, XVII, 2というのは『根本説一切有部毘奈耶雜事』

¹⁸ 『デカメロン』四日目序話によって梗概を記しておこう。2歳ばかりになる息子を残して妻が亡くなると、夫は財産を貧しい人々に分け与えて、息子とともに山にこもり、息子には俗世のことに一切触れさせないようにする。18歳になった息子は、必要に応じて町に出ていた父に、どこへ行くのかと尋ねる。父はありのままに話す。老いた父を気遣った息子は、一度町に連れて行って、買い物などの仕方を教えて欲しいと頼む。町でさまざまなものを見た息子は、いちいちその名前を父に尋ねる。たまたま若い女たちと出会って、あれは何と言うのかと尋ねられた父は、あれを見てはいけない、あれは悪いもので、鶯鳥というのだ、と応える。息子はあの鶯鳥を一羽手に入れて欲しいと頼み、あんなに美しいものは今まで見たこともないと言う。

¹⁹ É. Chavannes, *ibid.*, tome 4, 1934, pp. 231f.

のことである。シーフナーの言うその p. 8 r° - 9 r° というのが『雑事』のどの部分を指しているのかは不明なのであるが、シャヴァンヌの訳している物語から2, 40v. - 43r. が第29巻に当たることが分かるので、8r° - 9r°はそれ以前の巻ということになる。果たして第22巻にそれと思われる物語があるので、その梗概を紹介することにしよう²⁰。

隣国（渴沙）との間に争いが起こったので、猛光王（チャンダプラディヨータ）は大臣の増養に命じて攻めさせる。凱旋する増養を出迎えた王は、増養が連れて来た敵国の疥癬だらけの娘を見て、「このような娘と夜を過ごす男がいるだろうか？」と言う。「枕を共にするばかりではなく、この娘はその背中に馬乗りになり、その男にいななかせることでしょう（終亦騎其夫背令作馬鳴）」と増養は応える。増養は娘を医者に見せ、やがて病が治って見違えるように美しくなった娘を、星光と名づけて自分の養女に迎えると、「もし王を食事に招くことがあったら、お前はできるだけ美しく着飾って迎えなさい」と言い含める。招きに応じてやって来た王に、増養は娘を紹介する。その美しさに見とれた王は、さっそく彼女を後宮に迎える。星光に夢中になった王は政治を顧みなくなる。見かねた増養は星光に、「王の背中に馬乗りになって、いななかせることができるか？」と尋ねる。星光はいろいろと考えた末、垢だらけの服を着て粗末な床の上に臥せる。どうしたのかという王の間に、彼女は、天の怒りに触れて、今こうして患っているのです、と応え、父増養が隣国を攻めたとき、もし父を勝たせて下さったら、将来の夫の背中に馬乗りになって、いななかせましょう（騎其背上令作馬鳴）と天に誓ったのですが、こうして王さまのご寵愛を受けるようになった今、いったい誰にそのようなことをさせて、願いを聞き入れてくださったお礼を天にすればいいのでしょうか」と言う。そんなことはたやすいことだ、と王は応えるが、星光は黙っている。王が、他に何か祈願したことがあるのかと問うと、「バラモン大臣にまじないをさせ、楽人に琵琶を演奏させてください」と頼む。王は、バラモン大臣は家臣のなかにいるから、楽人はそなたが探せと言う。そのころ、遊女に入れ揚げて財産を使い果たした挙句、遊女の策略にのせられて、糞のうえに置いたナツメの実を口で拾い上げたうえ、罵倒されて追い出された健陀羅国（ガンダーラ？）の商人がおり、今は琵琶を弾じて暮らしていた。王に事情を聞かされた増養は、聞き知っている楽人がいるから、目隠しをして王宮に連れて行きましょう、と応えて、その商人を連れて行く。さて、真っ白い服を着て星光が王の背中に乗る（騎王脊背）と、バラモン大臣が王のためにまじないをし、楽人が琵琶を弾じるなか、王はいないて見せる（王作馬鳴）。その様を見た楽人が、「何とまあよく似ていることか、皆が知っている、財産を失った挙句、忌まわしい実でこの歯を汚したことを」

²⁰ 『根本説一切有部毘奈耶雜事 Kên-pên-shuo-i-ch'ieh-yu-pu-p'i-na-yeh-tsa-shih』第22巻。『大正新脩大藏經』第24巻（Taisho Tripitaka, vol. 24）所収、No. 1451, pp. 310-312

と歌う。その歌の意味を尋ねた王は、楽人に大金を与えて、遠国に追いやる。「国王たる者、女に愚弄されてはいけません」とバラモン大臣に諫められ、おおいに恥じ入った王は、増養を呼んで、「大臣のやつめ、わしが今日したことを諫めおった。あいつの髪を奥方に剃らせることはできないか？」と相談する。増養は妻に事情を話し、策略をもちいてバラモン大臣の髪をその妻に剃らせることはできないか、ともちかける。彼女はバラモン大臣の妻と話をしながら巧みに愛情の話題に誘導し、もしほんとうに愛されていると言うのなら、旦那さんの髪を剃ってごらんない、うまくいくはずないわ、とけしかける。床に臥してうめき声を挙げる妻にバラモン大臣が、どうしたのだと尋ねると、妻は、あなたが初めて王宮に呼ばれたとき、もし無事に戻ってきたらその髪を剃って天神に捧げます、と願いをかけた、それを忘れ、今こうして豊かに暮らしているのを見て、天神が怒っているのだ、と応える。夫の色好い返事に喜んだ妻は、増養の妻に自慢する。増養は王に、事は成就するであろうと知らせる。王がバラモン大臣を呼ぶと、天神に祈願するため半年は外出できません、という返事が返ってくる。彼が髪を剃ったことを確認した上で、王は再度出仕を命じる。頭に布を巻いてバラモン大臣が伺候すると、増養に言い含められていた二人の少年が、「美しい良家の女ならば、夫を意のままにして、馬のようにいなかせることもできよう、見よ、髪を剃られたこの大臣の頭を」と歌いながら、頭の布を取り去る。居並ぶ者たちが大笑いをし、大臣は深く恥じて退出する。得意になった増養が、「あんなふうに女に軽くもてあそばれるようでは、国家の大事は勤まらんわい」と言う。それを聞いた王はバラモン大臣に、何とか増養に恥をかかせることはできないだろうか、と相談する。バラモン大臣は、幻術を使う妹を呼び寄せる。彼女は幻術によって隊商を作り出し、肥溜めを邸宅にし、骸骨を美しい女商人にする。その隊商の積荷に税を掛ける仕事を命じられた増養は、女商人を見て欲望を感じ、一夜をともにしてくれたら税は免除してやろう、と持ちかける。「夜ならば」と彼女は応える。幻術師が昼を夜に変え、増養はさっそく出かける。増養が眠り込むと幻術が解かれる。彼は骸骨を抱いて、肥溜めに横たわっている。バラモン大臣が王を連れ出して、そのありさまを見せると、王は増養を嘲笑する。このようなことは王がたくらんだことに違いないと思った増養は出家してしまう。やがて、彼がいなくなって不安でたまらなくなった王は、増養を呼び戻して還俗させ、再び大臣に任命する。

シーフナーの論文名に見える娘の名「ターラー Tārā」にはサンスクリット語で「星」という意味があるので、これは「星光」のことであろう。「プラディヨータ王の逸話」という点でも符合している。従って、シーフナーが指摘している類話はこれであると考えてまず間違いはないものと思われる。『雑事』にはこのほかに該当しそうな物語がないことも、この推測を支持してくれる。ここには何よりも女の罠にはまって女を馬乗りにさせる

というモチーフが見られるし、色欲に惑わされて女に愚弄されてはいけないという忠告もあるし、そうした忠告をした者への復讐も見られる。登場人物を少し入れ替えて手を加えれば、すぐさま偽ジャーヒズの物語へと連なっていくものである。つまり、「独角仙人」の物語と較べれば、はるかに「アリストテレスとフィリス」に近いものであり、その類話として認めうる物語であると言ってよい。

この物語にはさらに、女に馬乗りさせるというモチーフのほかに、大臣の髪を剃るというモチーフが見られる。この2つのモチーフは、先に紹介したプールナバドラ『パンチャタントラ』にある類話にも見えており、この物語と『パンチャタントラ』の物語はおそらく起源を同じくするもので、古い昔話から分かれたものであらうと思われる。『雑事』のほうに幻術師まで登場して、さらにふくらみを増しているのに対し、『パンチャタントラ』の物語のほうに単純素朴であることから、あるいはこの物語の古形を伝えたものではないかとも考えられるが、確認できる年代としては『雑事』のほうにプールナバドラ『パンチャタントラ』より500年近く古く、偽ジャーヒズよりも四半世紀ほど古い。そして、これが今のところ、「アリストテレスとフィリス」の、納得しうる最古の類話であるということになる。

この『根本説一切有部毘奈耶雜事』は唐の義浄（635～713年）が訳したもので、訳出年は710年とされている。義浄は10年ほどインドで学んでおり、サンスクリット語の仏典は中国に持ち帰ってから訳出したと考えられるので、『雑事』の原典は遅くとも7世紀中には成立していたものと思われるが、残念ながらサンスクリット語の原典は残されておらず、その成立年代も明らかではない。従って、「アリストテレスとフィリス」の最古の類話の確実な年代は、『雑事』訳出の年、つまり710年ということになる。

シーフナーがこの『雑事』の記事を『アリストテレスの短詩』の最古の類話として紹介したことはまず間違いのないところであり、その間にある類話としてジャーヒズや『パンチャタントラ』を挙げ、さらに連想をたくましくしてジャータカ191にも触れているのであらうと思う。シャヴァンヌは「独角仙人」の中に現われる「騎」という漢字の持つ「(馬にまたがって) 乗る」「物にまたがる」という意味からこれまた『アリストテレスの短詩』を連想して、その系譜を論じたシーフナーの論文を紹介したのであらうと思われる。ちなみに、シャヴァンヌはこの「騎」を含む部分を、遊女が王に語るところでは <Je viendrai à califourchon sur cet ermite「その隠者に馬乗りになって戻って来ますわ> と訳し、仙人が遊女に語るところでは <Montez à califourchon sur mon cou「私の首のところに馬乗りに乗れ> と訳している。

シャヴァンヌは、No. 453そのものが「アリストテレスとフィリス」の類話ではないことは承知していたに違いない。それは、先にも記したように、No. 453の類話として『バルラームとヨアサフ』『デカメロン』等に触れ、段落を改めた上で、連想の中に浮かんで

くる作品として『アリストテレスの短詩』を挙げて、シーフナーの論文に及ぶという、その記述の仕方からも分かることである。従って、No. 453そのものが「アリストテレスとフィリス」の最古の類話としてインデクス類に挙げられることは、シャヴァンヌの本意ではなかったはずである。「アリストテレスとフィリス」の最古の類話をシャヴァンヌのNo. 453としたのが誰であるのかは詳らかにしないが、あたかもシャヴァンヌのNo. 453そのものが類話であるかのような書き方をしてしまった不注意な最初の指摘が、どうやらその後、一人歩きをしてしまったというのが真相なのではないであろうか。今後はシャヴァンヌのNo. 453ではなく、シーフナー (Schiefner, *Mémoires de l'Académie des Sciences de Saint-Petersbourg*, t. XXII, n° 7) を挙げるべきである。いや、それよりも710年にサンスクリット語より訳出された『根本説一切有部毘奈耶雜事 *Kên-pên-shuo-i-ch'ieh-yu-pu-p'i-na-yeh-tsa-shih*』第22巻を挙げるほうがいいであろう。年代は、これまで最古の類話とされてきた『経律異相』の516年より200年ほど下がることになるが、それは致し方のないことである。